



十干とは

五行のそれぞれが陰と陽に分かれ、五行としての共通性と同時に陰陽という背反する性状を兼ね備えた干かんという十の要素が考えられた。

木は、陽干の甲木こうぼくと陰干の乙木おつぼくに分かれ、火は、陽干の丙火へいかと陰干の丁火ていかに分かれた。土は、陽干の戊土ぼどと陰干の己土きどに分かれ、金は、陽干の庚金こうきんと陰干の辛金しんきんに分かれ、水は、陽干の壬水じんすいと陰干の癸水きすいに分かれた。



(フレームの同じボタンをクリックしてください)

陽干は、その特質が動的であるため、男性にたとえられ、陰干は静的であるため、女性にたとえられることが多い。

この十干は、自然の中における人間、人間と自然のめぐりとの関わり、つまり、造化の妙を極限まで単純化した結果、最後に残ったエッセンスのようなものである。

十二支とは

十二支は、現在も生まれた年の、えとどという形で生活に深く入り込んでいて、日常生活においても、それなりの役目を果たしている。

しかし、隋代に成立した書『五行大義』に、

《支と干は、五行によりこれをたてたものである。》

とあり、干のみではなく、支にも五行としての性状があることが言われている。つまり、十二支は地の気であり、あくまで時間経過を示すものであって、鼠ねずみとか牛とか虎といった動物とは全く無関係なのである。次は、十二支と五行の関係である。

十二支に配当された五行は、蔵干ぞうかんという形で支の中に含まれており、十二支も干に還元して理解することができる。

しかし、十二支の蔵干の構成は、四季の巡りの中の五行

の変遷に対応するはずのものであるが、子平の長い歴史の中で、多くの人が都合の好いように手を加えたり、四季とは無関係な考えを導入したため諸説あって、子平を混乱させる原因となっている。



六十干支とは

干は十をもつて一巡し、支は十二をもつて一巡する。この周期の違う干と支を組み合わせて六十の干支が作られた。干は天の気であり、支は地の気であり、支中の蔵干は人に対応して考えられ、これを天地人三才と言う。たびたび触れている殷墟いんきょの甲骨文中に、すでに六十干支が見られることから、その起源は三千年以上昔のこととなる。

しかし、陰陽五行論の黎明期れいめいの書は散逸して失われてしまっているため、古代中国人が、天地人という世界観をもつて干と支を組み合わせたとしても、その根底にどのよう

な意味を込めていたかは不明である。自然界には、十と十二という異なる周期があるとして、何らかの意味を見い出していたのではないかと推測するしかない。

次に六十干支を一覧表にして掲げておく。六十干支を列記する場合、甲木が十干の始まりであり、子が十二支の始まりであるとされていることから、甲子きのえねから始めるのが慣習となっているので、本書もそれに従うことにする。



最終更新
2000
・ 1
・ 16